しまなみ農業だより

開花前に好天続きだとかん水が必要です

昨年3月号で表年を予想し、しっかり剪定をしましょうと呼びかけたところ、なるほど皆さんしっかり剪定をしていただき、それでもまずまずの着花が認められていたのですが、終わってみれば生理落果が多く、はれひめ等では思わぬ減産となってしまいました。この原因は何でしょう？答えは天候にあります。

1　寒波の影響

昨年1月は10年以上ご無沙汰の寒波でした。大玉果を生産すべき中晩柑類では、充実した花芽を持つ結果母枝は樹冠外周にあるものですが、こうしたところが寒波に遭遇し枝の枯れこみ等が散見されました。枯れこみ整理のための樹冠外周の切り返しは、充実した花芽の減少とともに新梢の発芽を促し、結果的に生理落果を助長します。

2　開花期の天候の影響

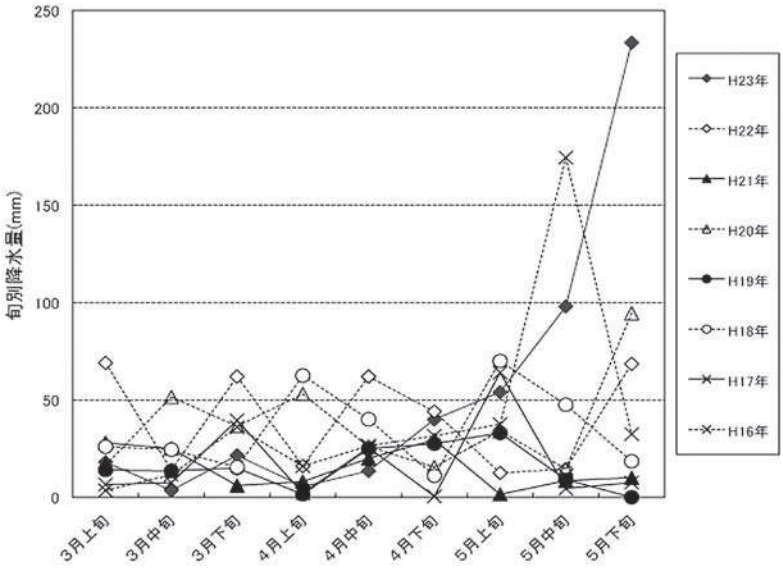
さらに昨年は開花がやや遅れ5月中～下旬だったのですが、この頃は近年まれに見る降雨がありました。開花期に天候が悪いと、花の充実が悪く生理落果を助長しやすくなります。さらに灰色カビ病が発生しやすくなり外観品質を落とします。露地せとかでは一昨年紹介したような黒点病の初期感染も多くなります。厄介なのは、これら病害が発生しやすくなるのはわかっていても、防除のタイミングを逸しやすくなることです。

3　開花期の好天に思わぬ落とし穴

開花期に天候がよいのは七難隠します。まず花がよく咲く。開花期の防除が実施しやすい。雨がないので灰色カビ病や初期の黒点病の発生が少なく外観品質がよくなる。さらに大切なことは、花がそろって一斉に咲くため果実品質がそろいやすく、玉ぞろい、着色のそろいもよくなります。開花期の長雨は各種病気をもたらし花も流れがちになります。しかし、開花前ずーっと天気がよいのも考えものです。開花前の乾燥が強すぎると、せっかく施用した春肥が吸収されず樹勢低下をもたらし、直花が増加すれば温州などでは小玉果が増加して隔年結果を助長、逆にはれひめ等では生理落果を助長することがあります。昨年の旬別降水量を見ると、発芽前の4月中旬までは1か月以上乾燥が続いてもと樹勢が低下しており、そこへ開花期の多雨により春肥の遅効き等も発生して新梢が思わぬ発生し、結果として生理落果を招いてしまったことがわかります。昨年は寒波によって元々よい花を持っていた樹冠外周の芽が痛み、残ったのは弱い花であったのがこの傾向をますます助長してしまったと推察されます。

4　今年こそしっかり剪定を

さて今年はどうでしょう。昨年は結果量が少なかったうえに夏～秋季にたっぷりと降雨があったため樹勢はよく結果母枝は充実し青々としており、かなりの着花数が見込まれます。必ず予備枝をとり新梢の発生を確保すること。その上で晴天が続き夏野菜の種まきに支障が出るようなら明らかに乾燥が進んでいますので、マルチの温州やはれひめ等、生理落果しやすい品種は適宜かん水してください。昨年の裏作のため今年表まわりになり、しかも偶数年（グラフでは奇数年は春季乾燥、偶数年は適度に降雨がある）で3月～4月に適度に降雨がありますと、思わぬ結果過多を招くかもしれません。



最近8年間の開花前の旬別降水量